



毒

毒

虫

*IMAGE by PPK
Written by Doujimayu*

毒虫

「お前ガキのくせにエロすぎんだよ。乳のサイズ幾つだよ」と毒虫が言った。

「ロリコンおやじがうるせえよ」と私は自分でも恥ずかしいくらい大きい胸を両手で隠そうとしたが、毒虫の細いが筋肉質な腕が私の手を払いのけ、おっぱいに顔を近づけて真正面から見据える。

「お前その赤い靴しよつてみるよ」と毒虫は目を輝かせて言った。

「何言い出すんだよ。くそ変態おやじ」

「お前その身体で、すっ裸で、その靴しよつたら変態エロ度数は神レベルだぞ」

「やるか、馬鹿。死ね」

「早く背負えよ。ほら」と毒虫は足元にあった靴から教科書をゴミみたいに床に放り出し、空になった赤い靴を私の前に突き出す。

「私が警察に行ったらあんた即効逮捕だよ」

「お前施設に行きたいのかよ。集団生活なんてお前に出来るのかよ」

「あんたに毎日ただでやられるよりましだろ」

「とにかく背負えよ。背負ったらお前のオツパイが縮むわけでもないだろ」と彼はニヤニヤしながら言った。

「わかったよ。糞ロリコン野郎」と言っただけで私は鞆を背負った。金具のところが裸の背中や腕にあたって冷たい。

「お前それ背負ったままで四つん這いになれ」

「ちゃんとゴムつけてよ」

「当たり前だ。俺達は親子だろ。ゴムをつけないと親子関係がややこしくなるだろが」と言っただけでつは意外に素直にゴムを装着する。

「もうゴタクはいって」と私が言った瞬間、熱、が下腹部で膨張した。

あああああああああああ、うあああああああ
ああうえええええあああああああ

「どうよ。セックスはいいか」

「う、うるさい……今、大事なところだから」

うううううんんああああうううううああんん
んなああああ

「お前は最高だよ、今までやった誰よりもいい」

うあああうううあああうううあああうううああ
う

「お前の母親もよかったけど、お前には負ける
な」

ううっやうううあ

「うう、すげえコントロールできねえよ」

毒虫もまだ二十二歳と若いのでセックスを一旦
始めると夜通しやることがある。当然次の日私は
学校を欠席する。

毒虫は死んだ母親の三番目の夫で一年前の冬か
らこの吉祥寺のマンションに住みはじめた。やつ
は母が死ぬまでは母としかセックスしなかったが、
彼女が死んでからは私と寝るようになった。毒虫
は時々くだらないウンチクを披露した。
「お前さあ、ガキつてのは人工的にできた概念な
んだよ」

「なに、ガイネンって？」

「近代以前はガキなんてなかったんだよ」

「近代ってなに」と私は毒虫にパンティを脱がされながら質問する。

「近代ってのは、産業革命後の世界だよ。イギリスで工場ってものが出来て人間様がやる仕事が激減したわけだよ」

「ふううん、それで」

「それまではガキってのは未成熟な年若い大人だったんだよ。だから働いていたし、農村とかでは若いうちからバンバン子供産んでたんだよ」

「だからってあんたが娘を犯していいのかよ」

「まあ聞けよ。それで工場ができて急に仕事がなくなつて仕方がないから未成年者にガキつていう新しいニツクネームを与えたんだ。それで、ガキから仕事を奪い学校に行かせて、セックスを楽しむ権利を奪ったんだよ」

「ふううん、そうなんだ」

「年齢じゃねえんだよ。セックスしていいかどうかってのは。お前みたいに成熟していて綺麗でセクシーなのは若いうちからやっついていいんだよ」

「ホストは口が上手いね」と私は冷めた口調でいった。

「口が上手いってのは、それだけを言うんじゃないな

いぜーそういったあとで彼は私のパンティをめくってアソコを長い時間かけて愛撫する。私のアソコはなんだか分からない透明な液体でびちゃびちゃになる。

死んだ母はよくいるホストが大好きな巨乳のヘルス嬢だった。彼女は十六で私を産んで最初の夫である父が逃げてからはキャバ嬢とヘルス嬢を一年交代でやりながら私を育てていた。ホストをやっている毒虫とはもちろんホストクラブで知り合い、毒虫は母の貯めている小金を狙って彼女と付き合うことにした。そして最初の出会いかから三ヶ月目には同棲を始める。毒虫が同居するようになって半年ほど経った頃に、母が友達と伊豆に温泉旅行にいき、毒虫と二人だけの夜があった。そして母が留守にした二日目の晩に毒虫は私のベッドに潜りこんできた。やつがそうするのは大体予想していたが（母がいないと私の胸をよく盗み見っていたから）、実際に来られると心臓が爆発しそうなくらい動揺した。

「なにするんだよ」と私はとりあえず聞いた

「性教育だよ、性教育」と毒虫は何でもないこと

のように言った。

「帰ってきたらママに言うよ」

「お前処女なの？ その乳のでかさで」と私の言うことを無視して毒虫はヘラヘラ笑いながら言った。

「なんであんたに言う必要がある？」

「まあ処女だよなあ、ビビってるもんなその顔は」

「別にビビってねえよ」

「お前なんでそんなヤンキー口調なの」

「うるせえよ」

「そうかあ、ヘルス嬢が母親だと尖って生きていけないとなあ。友達にナメられるとつらいか」

「うちのママを馬鹿にするのかよ」

「でも男のチンコ舐めまくってるぜ」

「うゝるゝさゝい」

「でも俺もババアのマンコ舐めて生きているんだ。お互い様だよな」

「そうだよ、腐れホストが」

「お前はママやおれみたいにジジイやババアの性の道具で終わるんじゃないぞ」と毒虫はしんみりとした顔でいった。そして何もしないで私のベッドから離れていった。私は少し拍子ぬけする。股

間がすごい湿っているのがばれなくてよかった等と考えた。

母は風俗の仕事が終わって深夜の帰宅途中にひき逃げにあって死んだ。火葬場で母を焼いた後、毒虫は私と一緒に家に帰るとすぐこう言った。

「葬式に金を使うくらいなら、お前に金をやるほうがいいだろ。二百万円あるよ。ママが貯めた金だ」と二百枚の万札が詰まった封筒を私の前に置いて。

「この金狙ってたんじゃないの？」と私はちよつと驚いて聞いた。

「まあ、狙ってたけど、お前も一応俺の娘じゃん。娘の将来は普通心配するじゃん」

「らしくないねえ」

「確かにな、でも、これもって叔母さんところ行けよ」母には妹が一人いた。

「会ったこともないよ。いるのは知ってるけど」

「でも、肉親だろ」

「にくしんってなに」

「肉親ってのは肉の親って書くんだよ」と毒虫は慈愛溢れる顔で私に言った。母が死んで気丈に振る舞っていたのに、ヤバイと思った。泣きそうに

なる。

「肉マンで出来たババアとか想像するじゃん」と私は声を震わせて冗談を言った。涙で視界がぼやける。

「訳わかんねえ」と毒虫は下品にせせら笑って私を引き寄せ抱きしめた。よく知らない男性用の香水のいい匂いがした。

「これは父親としてやってるの？」

「どっちでもいいよ。お前が選べよ」

「じゃあ、父親でお願い」

「あんまり、慣れてないぞ」そういつて毒虫は私の後頭部を長い綺麗な指で撫でてくれた。私は彼の固い胸に顔を埋めると安心感を覚えてずっとそうしていたかったが、しばらくして毒虫が私の身体からさっと身をひいた。

「お前胸でかすぎなんだよ、お前と親子ごっこするのってかなり大変なんだよ」と彼は苦笑いして言う。

「腐れホストだねえ」と私は何故か動揺して毒づいていた。頼りにしていた何かに裏切られたような痛い寒々しさを心に感じながら。

「それより、明日にでも叔母さんに連絡するぞ」

と毒虫は真顔で言った。私はその言葉を聞いて何故か頭に血が昇った。

「私を見捨てるのかよ」

「……俺とお前で親子ごっこは無理だろ。俺はただ若造だし、毎日朝帰りだし、お前に欲情するところもあるし」

「そんな会ったこともない叔母さんとこなんか、いきたくねえよ」と私は無意味に彼の胸を抗議するよう叩きながら言った。

「はあ、じゃあ施設いくか？」

「ここにいろよ」

「飯とか自分で作れるのか」

「当たり前だろ。作ってもらったことなんかねえよ」

「ふううん、どうしたもんだか」

「とりあえずこの間言ってた性教育の続きをしろよ！」

「なんだよ、急に」

「親子ごっこが、無理ならさっさとしたほうがいいじゃん」

「お前はガキの皮被った大人だな」

「大体処女じゃないから。前の父親にもう二回やられているから」

「……何歳のときだよ」と毒虫は啞然とした顔で言った。そのつまらない常識的な反応に私はキレた。

「うるせえよ。哀れむなよ。どうせまともじゃねえよ」

「……俺が悪かった」と毒虫は良く似合う銀のメタルフレームの眼鏡の向こうでキレ長の目を細めた。こいつはやはり私の好みだなあ、と改めて思った。

その晩初めて毒虫に抱かれた。何回もいきそうになった。前の父親より千倍よかった。